

ダイバーシティリレーエッセイ～様々なひとの多様な視点～

## 入試広報からダイバーシティへ

From advertisement for admission to diversity

伊藤 吾朗

中学時代に東大安田講堂への機動隊突入などがあった後に、公立の進学校に入学、さらにその後東京大学に進学し、クラスにおいても部活（卓球）においても個性ある人々と過ごせたことは、私の人生にとって大いにプラスになったと思っています。高校の卓球部の同期生は個性豊かで練習計画について対立することが多く、主将であった私を悩ませましたが、ひとしきり主張し合った後、誰かが「いつまでも言い合っても仕方ないから、後は伊藤に一任」と言い出して、結局みんなの意見がある程度取り入れた私の案で収まったことが度々ありました。このような生き方が大学、大学院、研究者と進むにつれてますます固まっていき、人々の多様な考えに耳を傾けられるようになってきたと思います。

さて、軽金属学会におけるダイバーシティについて、会長在任中に男女共同参画委員会を発足させましたが、その発端は、2004年度に茨城大学工学部の入試実施副委員長就任を学部長から依頼されたことにありました。上述の性格と関係があるかどうかわかりませんが、明らかに無理なことでない限り断らない性格が身につけていて、引き受けました。当時は18歳人口の減少の影響が出始め、茨城大学でも入試広報活動に力を入れ始めていました。そこで工学部の広報活動を始めると、工学部の不人気を示すデータや、「さらば工学部」というショッキングな見出しの日経電子版の記事などを目の当たりにしました。高校生に工学部を知ってもらうことと同時に、工学部において女子比率を高めることが課題であり、それが伸びしろであると理解しました。ことは工学部にとどまらず産業界の問題でもあるので、日本アルミニウム協会の産学懇談会や軽金属学会の理事会でその現状と大学で取り組み始めた活動を話したところ、経済産業省から非鉄金属産業への人材呼び込みの活動を始めるにあたって計画作成のまとめ役になってほしいと言われ、これも引き受けました。軽金属学会でも、人材育成WG長に就任を依頼され、引き受けました。ただ、この人材育成WGの提言に基づいて軽金属希望の星賞とともに設けられた軽金属女性未来賞については、当時は女性研究者の活躍が男性と同程度になれば廃止すべきと考えていたので、今なお続いていることを複雑な思いで見えています。

日本・世界に目をやると、2024年の日本の男女平等指数ランクが依然として118位と低いことやDEI (Diversity, Equity, Inclusion) を否定する米大統領の演説など憂うべきことが多いこのごろですが、皆様のご尽力で少しでも前進することを願ってやみません。

茨城大学 名誉教授、特命研究員  
共栄テクノシステム株式会社 日立工場長、技術顧問

## 孟母三遷

The importance of children's surroundings

小原 美良

息子が生まれた際、父から「孟母三遷」という言葉をよく聞かされた。孟子の母親についての故事で、子どもは周囲の影響を受けやすいので子どもの教育には環境を選ぶことが大切だという教えである。なるほど、私が理系の道に進んだのは父親の影響が大きく、働き続けるのは、母はもちろん周囲の女性たちがライフイベントも乗り越えて働いていたことを見てきたからであろう。また両親は、仕事だけでなく地域活動や趣味など自分の興味があることをやっている姿を見せ、何でも良いから興味があることをやりなさい、という教育方針だった。

ただ、私が育った時代は学校や地域活動でも男尊女卑の考え方が強く、男女で固定された役割があった。そのため興味のあることをやりたくても、「女だから」と役割を割り振られ、逸脱した行動は「女のくせに」と抑制させられたことも多かった。社会に出てからも仕事の割り振りや昇進の違いなど、「もしかして女性だから？」と思うこともあったが、周囲から「仕事があるだけでも幸せ」と諭されて交渉などもせずに受け入れてきていた。

転職を経て、2007年に軽金属学会正式組織として発足したばかりの女性会員の会に出席した。その後も定期的に参加するようになり意識が変わってきている。似たような境遇のなかでも、しっかりと自分をもちその道を進んでこられた先生や企業の研究者の方々のお話を聞くうちに、まずは自分のできることをやろうと元気をもらえたと、次の世代に繋げようという気持ちが芽生えた。そういうこともあり、学会での男女共同参画の推進活動に参加している。

人生に「もしも」はないが、古い慣習が残っていた時代に家庭も同様な意識であったのなら選択肢は狭くなっていたかもしれない。そう考えると、子どもに対して多様な社会があると示すことが大人の役割であろう。2025年1月1日、産経新聞社が選択的夫婦別姓について小中学生2000人にアンケートした結果を掲載した。半数が法律化に反対、「自分は別姓にしない」は6割という結果だったという。子どもは周囲の影響を受けやすい。夫婦同姓があたりまえの今の日本で暮らしていれば反対する子どもも多いだろう。しかしながら成長と共に価値観も変わる。将来、アンケートに答えた子どもたちがどのような環境に置かれるのかわからない。その際に「選択」できることで活躍の場が広がることを願っている。

写真は中学2年生の息子が使い古したバスケットシューズである。新品を購入しに行った際、成長と共にサイズだけでなく足の形も変わることを知った。足の形状も多種多様。靴も人生も選択肢があるほうが良い。



JFEテクノリサーチ株式会社 マテリアル評価・解析 Division 腐食評価・解析センター 腐食解析グループ